

熊本大学 工学部

正員

三 池 亮 次

同 上

正員

秋 吉 卓

同 上

学生員

○松 本 弘 一

1. 要 旨 骨組構造解析のように数式による現象表示が容易であるが、形状因子が複雑に関与する場合には、パイ定理による次元解析よりは、運動方程式そのものの無次元化によって、より適正な無次元積を誘導することができる。すでに、立体骨組構造の弾性基礎式をマトリックス表示し、その力学的性状を支配する無次元積を静的の場合について誘導し、2, 3の興味ある問題を提起したが、ここでは同様の手法を動的の場合に拡張し、骨組構造の振動現象を規定する無次元積と相似律を検討する。

2. 骨組構造の運動方程式の無次元表示

(a). 減衰強制振動の場合 変位を d とし、速度 $\dot{d}$ に比例する減衰力 C が存在し、外力が、

$$f(t) = P e^{i\Omega t} \quad (1)$$

で与えられる場合の、多自由度質点バネ系の振動方程式は、一般に次式

$$M \frac{d^2 d}{dt^2} + C \frac{dd}{dt} + K d = P e^{i\Omega t} \quad (2)$$

で与えられる。ここに、 M , K は質量および剛性マトリックスであり、 P , Ω は外力の振幅および角速度、 t は時間である。任意の節点における変位 d と $f(t)$ の中に回転変位 θ とモーメント M を含むとき、 d および $f(t)$ または P の次元を合わせるために、マトリックス L を用い、

$$\begin{aligned} d &= L_0 L d', \quad P' = L P, \quad L = \text{diag}[L_i] \\ M' &= L_0 L M L, \quad C' = L_0 L C L, \quad K' = L_0 L K L \end{aligned} \quad L_i = \begin{bmatrix} I & 0 \\ 0 & \frac{1}{L_0} \end{bmatrix}$$

とすれば、振動方程式は、

$$M' \frac{d^2 d'}{dt^2} + C' \frac{dd'}{dt} + K' d' = P' e^{i\Omega t} \quad (3)$$

$$\therefore \frac{E_0 A_0}{P_0} \left\{ \frac{\Omega_0^2 M'}{E_0 A_0} \cdot \frac{d^2 d'}{d(\Omega_0 t)^2} + \frac{\Omega_0 C'}{E_0 A_0} \cdot \frac{dd'}{d(\Omega_0 t)} + \frac{K'}{E_0 A_0} d' \right\} = \frac{P'}{P_0} e^{i \frac{\Omega}{\Omega_0} \Omega_0 t} \quad (4)$$

ここに、 L_0 , A_0 , E_0 は、基準部材の長さ、断面積、弾性係数、 P_0 は基準外荷重であり、無次元積

$$M^* = \frac{\Omega_0^2 M'}{E_0 A_0}, \quad C^* = \frac{\Omega_0 C'}{E_0 A_0}, \quad K^* = \frac{K'}{E_0 A_0}, \quad d^* = \frac{E_0 A_0}{P_0} d', \quad \Omega^* = \frac{\Omega}{\Omega_0}, \quad t^* = \Omega_0 t$$

を定義すれば、次の、無次元振動方程式を得るであろう。ここに Ω_0 は時間の逆数の次元をもつ。

$$M^* \frac{d^2 d^*}{dt^{*2}} + C^* \frac{dd^*}{dt^*} + K^* d^* = P^* e^{i\Omega^* t^*} \quad (5)$$

(1). K^* について — (5)式において、 $\Omega=0$ の場合が、静的弾性基礎式であり、無次元剛性マトリックス K^* が、基準部材の細長比 λ_0 、基準部材に対する剛比 K 、長さ比 ℓ_0 、断面積比 A_0 、弾性係数比 E_0 などによって表わされることについては、すでに報告の通りである。

(2). M^* について — 質量マトリックス M のうち、任意部材端における質量マトリックスを $\bar{M}$ とすれば、 $\bar{M} = \rho A \ell \bar{M}'$ (ρ : 部材の密度、 A : 部材断面積、 ℓ : 部材長) であり、

$$\begin{aligned} M^* &= \frac{\Omega_0^2}{E_0 A_0} \cdot \ell_0 \ell_i \cdot \rho A \ell \cdot \bar{M}' \ell_i \\ &= \Omega_0^2 \cdot \left(\frac{\rho_0 \ell_0^2}{E_0} \right) \cdot \frac{\rho}{\rho_0} \cdot \frac{A}{A_0} \cdot \frac{\ell}{\ell_0} \cdot (\ell_i \bar{M}' \ell_i) = \frac{\rho}{\rho_0} \cdot \frac{A}{A_0} \cdot \frac{\ell}{\ell_0} \cdot \ell_i \bar{M}' \ell_i \end{aligned} \quad (6)$$

ただし、 $1/\Omega_0 = \ell_0 / \sqrt{E_0 / \rho_0} \equiv \frac{\ell_0}{V_0}$, $V_0 = \sqrt{E_0 / \rho_0}$ (7)

であり、このような Ω_0 を用いれば、 M^* を規定する無次元積は、 $k_A, k_L, \ell_i \bar{M}' \ell_i$ の中に含まれる細長比 λ_0 および、基準密度 ρ_0 に対する密度比 ρ_p であることが考察されよう。

(3). C^* について — 減衰が、簡単な粘性減衰、構造減衰、履歴減衰等の何れの形式に従うかの如何にかかわらず、

$$C^* = \frac{\Omega_0 \ell_0}{E_0 A_0} (L C L) = \frac{1}{A_0 \sqrt{\rho_0 E_0}} (L C L) \quad (8)$$

の形をとる。

(4). Ω^* について —

$$\Omega^* = \frac{\Omega}{\Omega_0} = \frac{\Omega \ell_0}{V_0} \quad (9)$$

は、一種のストローハル数であり、 V_0 は速度の次元をもち、弾性体を伝わる実体波の速度を与える。

(5). d^*, ψ^* について — 変位の無次元積としては、静的の場合と同じく

$$u^* = \frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{u}{\ell_0}, \quad \phi^* = \frac{E_0 A_0}{\rho_0} \phi \quad (u \text{ は変位, } \phi \text{ は回転変位}) \quad (10)$$

である。また、時間の無次元積は

$$\psi^* = \Omega_0 t = \frac{V_0 t}{\ell_0} \quad (11)$$

である。

(6). 減衰強制振動の相似律 — (5)式において、実物 p と模型 m に対して、同一の M^*, C^*, K^*, P^* を与え、かつ

$$\left(\frac{\Omega \ell_0}{V_0} \right)_p = \left(\frac{\Omega \ell_0}{V_0} \right)_m, \quad \left(\frac{V_0 t}{\ell_0} \right)_p = \left(\frac{V_0 t}{\ell_0} \right)_m \quad (12)$$

となるように、強制振動を与えれば、(5)式により、まったく同じ d^* を得るはずであり、

$$\left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{u}{\ell_0} \right)_p = \left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{u}{\ell_0} \right)_m, \quad \left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \phi \right)_p = \left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \phi \right)_m \quad (13)$$

なお、速度 v 、加速度 a の相似律は、(5)式左辺第2項、第1項より

$$\left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{v}{V_0} \right)_p = \left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{v}{V_0} \right)_m, \quad \left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{\ell_0 a}{V_0^2} \right)_p = \left(\frac{E_0 A_0}{\rho_0} \cdot \frac{\ell_0 a}{V_0^2} \right)_m \quad (14)$$

である。

(b). 自由振動の場合 (5)式において $C^* = 0$ 、 $P^* = 0$ とおけば、同様無次元積を得る。

参考文献：三池亮次、松本弘一「トラス部材の細長比に関する考察(第2報)」土木学会第26回年次学術講演会 S46.10

福井武弘、三池亮次、右田泰弘「立体骨組構造物の力学的相似条件について」土木学会第25回年次学術講演会 S45.11